

ど  
の  
よ  
う  
に  
育  
て  
る  
か

— 生  
ま  
れ  
る  
ま  
ま  
か  
ら  
—  
— 生  
ま  
れ  
て  
か  
ら  
—

1989. 4 No. 1

# みちしるべ保育

発行 左京キリスト教会出版部  
〒606 京都市左京区下鴨南  
茶ノ木町29 電話781-9640  
振替 京都5-40566  
編集 教会役員会  
印刷 片桐軽印刷

「深い智慧は、銀によって得るよりもまさる」—聖書—

## どのような育てるか

—生まれるまえから(一)—

松下昌義

どのような親も、自分の子供が立派に育ってほしいと願っています。

親は、子供に対して「願いごころを持つ者」であり、子供は、親から「願いごころをかけられている者」であります。

このように、親と子供とは深い愛情で結ばれています。特に、母と子との絆はとりわけ深いものがあります。そして、子供は、そのような親の愛情によってこそ、心身が健やかに育っていくのです。

ですから、昔も今も、「育児」ということには、どの親も熱心です。

「育児」と言うとき、最も大切なこととして関心がよせられることは「肉体の成長」であります。

これは当たり前前で、肉体の健康は人間として生きて行くための基礎になることです。

それにしても、「育児」とは、肉体の成長ばかりでなく、知恵の成長もふくまれ、さらに、心(魂)の成長もふくまれています。

ところが、ともすれば、乳児期には、肉体の成長のみに親の関心がよせられ、また、幼児期や児童期になりますと知恵の成長に親の力が特にいれられま  
す。そして、とかくおろそかにされがちなのが心(魂)の成長についてです。

肉体と知恵と心(魂)とが合い交わりつつ成長して行くのが、私たちの身体(からだ)であります。

しかも、子供のそのような成長は、生まれてから始まるのではなく、お母さんの内に受胎した時から、すでに始まっているのです。その意味で、昔は

受胎した時からその子供の年令が数えはじめられ、出産した時には一才とされたのは正しいといえます。

しかし、今は、子供が生まれたときを〇才として数え、あたかも、子供の成長はその時から始まったように印象づけられています。そうではないのです。

子供の肉体、知恵、心(魂)は共に、お母さんが受胎した時から始まっているのです。そのことから、

胎児によい感化を及ぼすよう、妊婦が品行を正しくこころがける「胎教」を強くすすめられたのです。

「胎教」において、特に注意をうながされることは、妊婦であるお母さんの「想念」の管理であります。この「想念」こそ、胎児のこれからの成長に大

きな影響を与えていくのです。

—つづく—

1989.5 No 2

# みちしるべ保育

発行 左京キリスト教会出版部  
〒606 京都市左京区下鴨南  
茶ノ木町29 電話781-9640  
振替 京都5-40566  
編集 教会役員会  
印刷 片桐軽印刷

神に従う人の道は輝き出る光、進むほどに光は増す — 聖書 —

## どのような育てるか

— 生まれるまえから(二) —

松下昌義

米国のパスネルという人が、とても興味深い実験

をしました。それは、妊娠している母親の腔の中に小さいマイクrohンを挿入して、胎児が聞いているものとはほぼ同じと考えられる音をとらえ、それに胎児がどのように反応するか、ということ調べたのです。(これと同じような実験を日本でも、岡山大学の産婦人科の先生が、自分で小さなマイクrohンを胃に飲み込んで実験されたのが最初だということをはなにかの本で読んだことがある)

すると、母親が話したり歌ったりする音声などはっきりと聞き取れることが分かったと共に、胎児は母親の音声が急に変わると手足を動かしたり、心拍数が変わったたりする反応を示すことなどから、胎児は確かに、母親の声を聞き分けていることがはっきりとしてきました。

お母さんのおなかの中にいる子供が、お母さんの声を聞き分けている、それだけではなく、どうやらある種の苦痛も感じているし、快さも感じているの

ではないか、ということも、少しづつ分かってきたようであります。そこで、先にノーベル生理学賞を受けたエックルという人は、赤ん坊が、喜び、興奮、恐れ、怒り、失望、満足、苦痛などの意識を、日がたつに従ってはっきりと持つようになるように、生まれる前から、即ち胎児のときから、同じように発達しつづけているということを発表されました。

これらのことは、子供を育てることが、生まれる前から始まるのである、ということをし、私たちに教えてくれたのです。

しかし、現在保健所でなされる、妊婦に対する検査はもっぱら妊婦と胎児の肉体的な異常のみをしらべること、関心が向けられています。

「胎児にも意識が働いている」と言っても、決して間違いないこの研究結果の報告を、私たちは驚きを持って聞くと同時に、「体に異常がなければ、すべてよし」という胎児にたいする見方と、「育児は生まれてからするもの」という考え方に、根本的な反省を強く促していると言えます。

胎児を宿している母親やその周囲にいる家族、更に、家族をとりまく社会、国家、世界や人々は、胎児が人間として相応しく成長していくために、どのように関わればよいのでしょうか。

— つづく —

# みちしるべ保育

1989.6 No.3

発行 左京キリスト教会出版部  
〒606 京都市左京区下鴨南  
茶ノ木町29 電話781-9640  
振替 京都5-40566  
編集 教会役員会  
印刷 片桐鞆印刷

神は悪人にも善人にも太陽を昇らせてくださる —イエスの言葉—

## どのように育てるか

—生まれるまえから(三)—

松下昌義

「ひとりっ子では可愛そうだし、それに、もしも  
の子が死んだりしてしまったら子どもがいなくなる  
し、思い切って、もう一人つくろう、とうちの人と決  
めたのよ」

「そう、偉いわね、私もそう思っているんだけど  
経済的に大変だし、それに、自分のしたいことも出  
来ないし、とって、もうひとりいた方がいいとも  
思うし、今、もうひとり作る、かどうしようかと、  
うちの人と考えているのよ」

「そんなこと考えないで、思い切って、作りな  
いよ」

こんな会話が、若いお母さんの間で交わされてい  
ます。

「子どもは自分達でつく、る、もの」と考えている母  
親の胎内にやどった子どもは、地獄のような処に放  
り込まれたのと同じです。このような母親の想念  
(思い)の中にどっぷりと漬けられて成長する胎児  
の魂(精神)が、どうして健康であることが出来ま

しょうか。

胎内にいる間の子どもは、肉体に於いては勿論の  
こと精神(魂)に於いても母親と一つにつながり、  
その影響を丸々受けて成長するのです。昔から、  
「胎教」ということは、この事実を元にして成り立  
っています。「子どもは神さまが授けて下さるもの」  
という思いを、昔の親は心の深いところでもって  
ました。それは、その人たちが子どもを宿し産むと  
いうことに於いて、命に対する畏敬の念を抱いてい  
たということです。このような想念こそ「胎教」の  
最も大切な出発点なのです。

自分達で子どもはつく、る、もの、とって産み育て  
る親は、子の命に対する畏敬の念を持つことなく自  
分の楽しみとして子どもを育てる親になります。そ  
れはあたかも、動く着せ替え人形に自分の好みのも  
のを着せて楽しむような育て方をしてしまいます。  
そうすることを、子どもを可愛いがっているとつい  
込むのです。しかし、それは、子どもを自分がつく  
、るといふのと同じく、自分中心の想念にもとづいて  
いるのです。ですから、そのような親は、胎児に対  
する胎教ということについても、「胎児の時から学  
習塾に入れようとするような発想」になるのです。

—つづく—

1989. 7 No. 4

# みちしるべ保育

発行 左京キリスト教会出版部  
 〒606 京都市左京区下鴨南  
 茶ノ木町29 電話781-9640  
 振替 京都5-40566  
 編集 教会役員会  
 印刷 片桐軽印刷

神は悪人にも善人にも太陽を昇らせてくださる —イエスの言葉—

## どのように育てるか

—生まれるまえから(四)—

松下昌義

望まれない妊娠。これは親にとってだけではなく子にとってもつらいことです。いやだ、困った、と思っているうちに、つわりがおこり、お腹がだんだんと大きくなってくる。ますます思いが暗くなる、ということになると、親のその思いに包まれて育ったお腹のなかの子どもは、どうして明るく幸いな人生を送ることが出来る者になれるでしょうか。

また、妊娠しても、お腹の子どもに思いをよせることなく、タバコや酒を飲み、身体的に思いのままに動き、悪想念をいだいて生活している親から、どうして明るい子どもが生まれてくることができるのでしょうか。

わたしは、この世のどのようなものも、「思いが固まった物」だと思っています。即ち「物とは思いの固まり」だということ。その意味で、人は神さまの思いの固まりなのです。このような神さまの思いを受けて人の親は、わが子に願いごころをそそがなければならぬし、そそげるように親は神さま

に在らしめられています。

ところが、そのことを無視して、自分の都合、自分だけの感情でお腹のなかにいる子どもにかかわるとき、子どもは、絶対に正しく明るく育ちません。

母親の内に子どもが宿ること、つまり妊娠ということは、子どもにとっても親にとっても大いなる人間になるための出発のときなのです。

神さまは、人間に愛ということを体得させるために、妊娠ということを通して子どもが育つようにされたのです。十ヶ月の間に、親は胎児にたいする慈しみを通して愛ということを体得し、胎児は、その愛を受けることにより、自分を人間としての明るさと生きる喜びと力との基本となるものを体得するのです。

にもかかわらず、妊娠、出産を通して、それらのことがらを何一つ親も胎児も体得しないままで無駄にすぎずならば、ただ、産んだだけ、ということになってしまいます。

次号では、胎教の実際を少し考えてみます。

尚、胎児の世界について、私が多くのお示唆を受けた本の中から三冊を参考のために紹介しておきますよう。

「胎児の世界」 三木成夫 中公新書

「胎児に音楽は聴えるか」大島清 P H P 研究所

「胎児からの子育て」 大島清 築地書館

1989. 8 No 5

# みちしるべ保育

発行 左京キリスト教会出版部  
〒606 京都市左京区下鴨南  
茶ノ木町29 電話781-9640  
振替 京都5-40566  
編集 教会役員会  
印刷 片桐製印刷

どんな時にも感謝して祈りなさい — 聖書 —

## どのよう<sup>に</sup>育てるか

— 生まれるまえから(五) —

松下昌義

心配することはいりません。あなたは神から恵みをいただきました。あなたは身ごもって男の子をうむでしょう。

これは、イエスの母マリアが、天使から受胎の知らせを受けたとき聞いた言葉です。

この出来事が私たちに教えている、最も大切なひとつは、本来子供は、神さまが備え、与えてくださるということです。

お母さんになる者には、そのとき、神さまが必ず「あなたは、神さまから恵みをいただきましたよ。」

あなたは、身ごもって子どもうむでしょう」と語りかけていらっしゃるのです。

「胎教」ということは、この神さまのお言葉を聞くところから始まるのです。聞くといっても、耳元に誰かの声が聞こえてくるのを聞く、ということではありません。そうではなくて、心で聞くとも言います。また、そのように自覚すると言いますか。とにかく、「今、私の内に宿った子供は

神さまが、私たち夫婦に与えて下さったのです」という自覚を持つこととあります。そして「有り難うございます。一生懸命に育てます。よろしくお守りください」という祈りを、手を合わせて真剣に捧げること。これが「胎教」の初めなのです。というより、すべてなのだ、と言えます。

このような祈りをするのに、特定の場所や時はいりません。また、特に声を出してする必要もありません。歩いてるときでも、台所に立っているときでも、勿論、部屋で一人にいるときでも、また、床のなかにいるときでも、心のなかで、ひとりで、何度も何度も繰り返し返して、祈ることが出来るのです。

そのような祈りをおして、私たちは、自分が祈る祈りの言葉の深さへと導かれて行き、心の底から「今、私の内に宿っている子供は、神さまが、与えてくださった子供なのだ」という感謝の気持ちがあるようになるのです。すると、次に、有り難いとだ、という喜びが、自然に自分の胸にひろがってくるようになります。そして、それが、また祈りと感謝に導いてくれるという働きをするのです。



— つづく —

# みちしるべ保育

1989. 9 No 6

発行 左京キリスト教会出版部  
〒606 京都市左京区下鴨南  
茶ノ木町29 電話781-9640  
振替 京都5-40566  
編集 教会役員会  
印刷 片桐軽印刷

その光は、まことの光で、世に来て  
すべての人を照らすのである。

— 聖書 —

## どのようなに育てるか

— 生まれるまえから(六) —

松下昌義

「女性は子宮で考える」と言われますが、これは私たちにとても大切なことを教えています。私たちは、考えるということは頭脳だけでするものだと、思い込んでいますが、そうではなく、腹でも考えますし、胸でも考えることが出来るのです。

「胸に手をあてて静かに考えてごらん」と言い、「腹をしっかりと据えて考えて来なさい」ともいいます。

頭脳に対して、腹脳という言葉が東洋医学にはあるそうです。胸とか腹などは、自分の外からの力(エネルギー)を受けるとともに出す働きをしているところなのです。このように言いますと、意外な思いを持たれる方があるとおもいますが、そのような方は、頭脳中心に物事を受け取る狭い考えに囚われておられるからであって、実は、その方自身も腹や胸で事を為していられることに、ただ、気がついておられないだけです。

例えば、なにかに関わって感激し感動をするとき

胸が熱くなり、身体の中心が下腹にうつり、喜びが全身にみなぎるのを覚えます。

希望、勇気、安らぎ、祈り、感動、感謝、深い喜び、落ち着き、これらはみな、胸や腹の働きなので

す。  
深い瞑想は、頭だけのことではなく、胸と下腹とに、外から、天から、神さまから、清い、お恵みを深く静かに息と共に吸い込み、ただかなければ、絶対にできません。その場合、頭脳はむしろ邪魔になるくらいです。理屈よりも、一度試してみられれば直ぐに分かることです。

胎児は、お母さんの子宮の中で育ちます。子宮はお母さんの腹脳なのです。胸とともに子宮は、神さまのお恵みを受け取る場所なのです。お母さんの子宮を、ただ、胎児に栄養を与えるカプセルのようなものだと考えるなら、それはとんでもない間違いです。胎児は、お母さんが、神さまの愛と力を自分のもとに、注ぎ込んでくれることを待っています。静かに、胸と下腹に手を当てて、思いを神さまの愛、イエスさまの優しさに、深い信頼と親しさとをもって、「よろしく、お願いいたします」と、胎児と共に祈るときを持ちましょう。

— つづく —

# みちしるべ保育

1989.10 No.7

発行 左京キリスト教会出版部  
〒606 京都市左京区下鴨南  
茶ノ木町29 ☎781-9640  
振替 京都5-40566  
編集 教会役員会  
印刷 片桐軽印刷

願いなさい。そうすれば与えられる

— イエスの言葉 —

## どのように育てるか

— 生まれるまえから(七) —

松下昌義

神さまのもとからきて、わたしたちのうち  
にやどったこともよ、わたしたちは、  
あなたをよろこびむかえます。

神さまのもとからきて、わたしたちのうち  
にやどったこともよ、かみさまのあい  
のひかりをうけて、たましいもにきたい  
も、すこやかにそだってください。

神さまのもとからきて、わたしたちのうち  
にやどったこともよ、わたしたちは、  
神さまのたすけをいただいて、あなたを  
みまもり、そだてます。

神さまは、かならずなしとげてくださ  
います。  
神さま、ありがとうございます。

胎児は、一歩一歩、確実に順序をふんで成長して  
いきます。受胎して三十日目より四十日目ぐら  
い  
わずか十日の間に古生代一億年の進化の道のり、即  
ち、エラの消滅、手足の形成、尻尾の変化、顔面形  
成などがなされて行くのです。

その創造進化の業が、正に、一日が千年の速さで  
なされて行くことを知る時、身が引き締まる思いが  
いたします。

そのような業が、必死で為されているのに、親が  
まったく無関心で、「勝手でしょ」と捨てておいて  
よいものでしょうか。

このような創造進化の業が為されているしが  
「つわり」だと言えます。「つわり」は胎児の、お  
母さんへの協力の呼び掛けなのです。

「つわりは、いやなことだ。苦しいことだ。なけ  
ればよいのに。なんでこのようなことが。いやだ、  
いやだ」と思うならば、胎児を見捨てることになる  
のです。そうではなく、「よくがんばってね、神さ  
まの助けを、お母さんは、お祈りしますよ。」と答え  
てあげることが大切です。そして、「神さま、よろ  
しくお祈りします」と、おなかに手を置いて、何度  
も祈りましょう。





1989. 11 No 8

# みちしるべ保育

発行 左京キリスト教会出版部  
〒606 京都市左京区下鴨南  
茶ノ木町29 電話781-9640  
振替 京都5-40566  
編集 教会役員会  
印刷 片桐軽印刷

いつも感謝し、喜んでいなさい — 聖書 —

## どのように育てるか

— 生まれるまえから(八) —

松下昌義

「妊娠三カ月」という時期は、胎教ということにおいて、とても大切な時期とされています。

それは、胎児の性別が決まりかけ、その形がととのえる一歩手前であり、生まれつきの性質が定まりかけて来る時期だからです。この時期は、お母さんの感情の動きが、胎児に大きく影響をあたえると言われています。

ですから、お母さんは優しい思いの中で、自分が願う子供の身の姿を念じつつ、「神さまよろしくお願いたします」と強い強い信頼を神さまに對していただきお祈りすることが大切です。そして、どんな事にも怒りをいだかず、常にイエスさまの祝福の御手が胎児の上におかれていることを思い、感謝と明るさをもって日々を過ごすようにしたいものです。

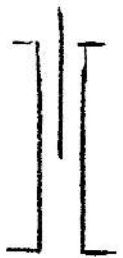
胎児は、自分が形つくられて行く中で、お母さんの祈りによって、神さまの恵みの力が、成長する細胞の一つ一つに注がれることを待っているのです。

「神さまのもとから来た、私たちの可愛いこともよ、お母さんもお父さんも、あなたの心と身体とが、神さまからの光りを受けて明るく健康に育っていくことを祈っていますよ。がんばってね。」と、お腹に手をあてて、心の中で念じ祈りましょう。

この時期、まだ「つわり」が続いている方があるかもしれませんが。またイライラする気分が起ってくるものです。わたしは、男でその時の体験は実感できませんが、ただ、イライラとか不安とか、怒り、悲しみ、腹立などは生理的にも精神的にも、且つ霊的にも毒素を身体に生み出し、暗さをはびこらすことになり、その結果、胎児にそれらを注入してしまうことになります。

お母さんは、「自分の内にいる子供が、どのような生き方をこの世でするか、その鍵を握っているのが、今のわたしなのである」ということを、確りと自覚していなければなりません。このことは、お父さんもおなじであります。

この時期の胎児は九センチ二十グラムほどで、未だ外からは下腹の大きさが目立たないだけに、よく気をつけたいものです。



# 保育るべしるみち

発行 左京キリスト教会出版部  
〒606 京都市左京区下鴨南  
茶ノ木町29 電話781-9640  
振替 京都5-40566  
編集 教会役員会  
印刷 片桐軽印刷

— 聖書 —  
悪口を捨てなさい

## どのように育てるか

— 生まれるまえから(九) —

松下昌義

出産した新生児とお母さんとが、ぴったりと「息」が合うと、赤ちゃんもお母さんもなにかにつけてやりやすいとおもいます。

勿論、たいていの母子は「息」が合っているようですが、それは、お母さんが自然に自分を赤ちゃんに合わせているからだということが、最近の研究で明らかになってきたとのことです。

ところが、本当に、母子の「息」がピッタリと合うためには、胎児の時から「息」をあわせるようにしておかなければならないと言われています。このことは、専門的なことは分からないわたくしでも、「その通りだ」とおもいます。

何ごとにおいても練習という積み重ねがあつてこそ、よい結果が出るものです。その練習とはこの場合どういうことかと申しますと、「胎児」とお母さんとの「きづな」をしっかりと持っておくということです。

「今日は赤ちゃん。はじめまして、私がママよ」

とかいう歌がかつて流行ったことがありますが、生まれてから「今日は、はじめまして、私がママよ」では、的もな育児はできないのです。子供とお母さんとの出会いは、妊娠する以前から天と地とで始まっているのであります。赤ちゃんとなり、そのお母さんとなるべき者は、神さまにより双方の願いごころにより思いが合い、お母さんの体内に赤ちゃんは天から天使のように舞い降りてきて宿るのです。まさに、生まれてから「はじめまして……」ではだめなのです。

「きづな」をしっかりと結ぶ秘訣は、胎児にたいするお母さんの「愛情と理解」であると、バニーという先生が「胎児は見ている」という著者に記しています。

お母さんは、健康の管理は勿論のこと、特に「思い」の管理を怠ってはなりません。

心を落ち着け、次のように祈る時を持ちましょう  
「今、私と私の胎児とは、神さまの恵みと愛の光りに包まれる。その肉体と魂とは光り輝く。私と胎児とは共に手を合わせて、神さまの恵みと愛とをほめたたえます」



# 保育るべしるみち

発行 左京キリスト教会出版部  
〒606 京都市左京区下鴨南  
茶ノ木町29 電話781-9640  
編集 京都5-40566  
編集 教会役員会  
印刷 片桐軽印刷

いつも善を追ひ求めなさい

— 聖書 —

## どのように育てるか

— 生まれるまえから(一〇) —

松下昌義

最近、お酒を飲んだりタバコを吸ったりする女性が多くなって来ました。そのこと自体は、別に問題ではありません。タバコやお酒を、「男たしなむべし、女たしなむべからず」とは言えません。

しかし、酒やタバコの身体に与える害は万人がよく知るところであります。自分の健康の為に止める人が増えつつある今日、だれもがよくよく注意してそれらと付き合う知恵がひつようだと思います。ましてや、女性は人類の未来を託され、未来を担って行く子供を生み育てる責任を、神さまから特別に与えられている者です。その女性が、特に妊娠中に酒やタバコを口にするには、まことに人類の将来にとって一大事であります。

「酒は胎児を不具にし、殺すことだつて出来る。」

……大酒飲みの母親からは奇形児や病弱な子どもが生まれることは非常に高い……最近十年間ほどの研究を見ただけでも、その科学的理由が明らかにされている……いったん胎盤を通過した場合、どの程度

の影響が及ぼされるかは、胎児が浴びたアルコールの量と、その時の胎児の発育段階によって決まる。

最もいいのは、妊娠したら酒を飲まないことだ……母親が酒を飲めば飲むほど、胎児の知恵が遅れたり活動過多になる率が高まり、それに伴って不整脈が生じ、頭が小さいとか、耳の位置が低いとかの頭部奇形が増えるということだけは明らかにしている」

(T・バーニ著「胎児は見ている」)

胎児に害を与えるのは酒やタバコだけではありません。今日では、さまざまな薬害が日常的に私たちに襲いかかって来ています。このような状況のなかで、胎児を宿し、子どもを育てるお母さんは、とても重い責任を託されていることを思うとき、その誇りと使命とをいま一度しっかりと神さまのまえで畏敬をもって自覚しなければなりません。

しかし、一方、男たちも、この世の職業人である前に、一人の父親として、男として、子どもを宿し産み育てる母親、女性と共に胎児の訴えを聞き、それに応える者とならねばなりません。

この基本を忘れるとき、遂に、神さまは人類から子どもをとりあげられるでしょう。

「神さまのもとから来て、私に宿った命よ、

今、神の光りを、わたしと共にいただきます。清められて光り輝きましよう」

# 保育るべしるみち

発行 左京キリスト教会出版部  
〒606 京都市左京区上鴨南  
茶ノ木町29 電話781-9610  
編集 京都5-40566  
印刷 教会役員会  
印刷 桐蔭印刷

— 聖書 —  
たえず感謝しなさい

どのよう<sup>に</sup>育てるか

— 生まれるまえから(十一) —

松 下 昌 義

仲のよい夫婦からはよい子が生まれ、仲の悪い夫婦からはよい子は生まれまいと言われます。そのことに付いて調査をした一つの結果が、つぎのように報告されています。

「十分に満ちた不安のない関係にある夫婦に比べ、何時もいがみ合ってばかりいる夫婦からは、精神的ないし肉体的に障害のある子どもが生まれる危険が約二、五倍にもなる」と。——胎児は見ている——

このことは、お母さんのお腹、つまり子宮というところが、胎児にとって肉体ばかりではなく精神の形成においても、とても大切な役割を果たしているところなのだということでもあります。

「胎児期体験」という言葉があります。それは、その子どもが胎児の時期に、お母さんの子宮の中で精神的に受けた影響のことをいうのですが、「幼児期体験」が、その人の性格や生き方に色々な影響を与えるように、「胎児期体験」も出生後もその人の

性格などに影響をのこすと言われています。

よい「胎児期体験」をその子どもにさせてやるということは、不安と敵意とを胎児に与えないことでしょうか。すでに、学んで来ましたように子宮の中で生活している胎児は皮膚で感じ、耳で聞き、口で味わい、鼻で嗅ぐということをしているのです。それは、他でもなく自分の外の世界を自分の内に取り入れて、自分という者を形成しているということでもあります。それを胎児は、子宮という世界でなしているのです。

その場合、最も大切なことは、不安と敵意とを与えないことであると申しましたが、それは、胎児がお母さんの支えを失ったと感じさせないことです。お母さんの支えを胎児が失うことを「子宮内母子分離」と言われているようです。そのとき、胎児は不安になり、胎児にとって子宮という生活の場が、忽ち暗くて淋しい不安の場となってしまいます。その結果、精神に障害を持って生まれる確率がとてもたかくなるようです。

天から私たち夫婦のもとに贈られてきた子どもよ、安心しなさい、私たち夫婦は神さまに感謝しつつ、仲よく協力をして育てます。安心しなさい、私たちの子どもよ、あなたは光り輝きます。

# 保育べしるみち

発行 左京キリスト教会出版部  
〒606 京都市左京区下鴨南  
茶ノ木町29 富781-9640  
販 替 京都5-40566  
編 集 教会役員会  
印 刷 片桐軽印刷

いささかも疑わず、信仰をもって願いなさい — 聖書 —

## どのように育てるか

— 生まれるまえから(十二) —

松下昌義

胎児は、すでに見ており、聞いており、感じているということ、さらに、お母さんの感情や思考を読み取ることが出来る「人」として、子宮という世界で生きている、というさまざまな研究による報告は従来の小児科学の、胎児はただ受け身で、精神など持たないとされてきた、胎児についての見解とは、まったく異なったものでした。この点について私などは、発言する資格はないのですが、一人の信仰人として「信仰的」に考えるとき、「さもありません」と、深く共感を覚えるのです。

「命」とは、神さまが与え給うものですが、その働きは、全宇宙の命の営みと共鳴して、それぞれの命として、宇宙意志を発現しているものなのであります。そして、私たちの命も、その例外ではないばかりか、宇宙意志を自覚的に受けとり、積極的にそれを発現させる勤めを、この地球という場で与えられている者なのであります。そのように生きること

が、神さまの栄光をあらわす、ということにほかなりません。

胎児の命も、当然、全宇宙の命の営みと共鳴しつつそだつのであり、共鳴しなければ、健全には育たないのです。このことが、命が育つということに於いて、どれほど大切なことであるか、未だに多くの人々はよく知りません。(このことについては、項を改めて記してみようと考えています)

その命の営みについての波動に一定のゆらぎがあることに科学は気付きはじめて来ましたが。海の波のおと、川のせせらぎ、母体の体内音、クラシックの名曲などもそれであるということです。

そこで、「胎教」ということにおいて、最後に記しておこうと思いますことは、それらの命の営みの波動に乗せて、聖書から、特にイエスさまの御言葉の部分のリズムよく、自分自身にも、胎児にもこころよく、聞かせ、響かせる時を、是非とも持つていただきたいと思うのです。勿論、このことは、何方においても実践されることをお勧めいたします。

そのとき、あなたは、天地いっばいの命を共感し神さまのお恵みが五体に満ち、喜びと感謝と安らぎを深く深くおぼえることでしょう。

# 保育るべしるみち

発行 左京キリスト教会出版部  
〒606 京都市左京区下鴨南  
茶ノ木町29 電話781-9640  
振替 京都5-40566  
編集 教会役員会  
印刷 片桐経印刷

わたしたちの本国は天にある

— 聖書 —

## どのように育てるか

— 生まれてから — (一)

松下 昌義

生まれてから一才になるまでを「乳児期」と一般に言われています。そして、生後一カ月までをとくに「新生児期」とよぶことにしているようです。

×

×

胎児期においても乳児期においても、さらに児童期、青年期、においても大切なひとつは、親と子のきずなをしっかりと持つ、ということとです。特に乳児期にはそのことがとても大切なこととであり、この時期は、親と子のきずな作りへのみ親は専心しなくてはなりません。

「きずな」とは「深いつながり」のこととあり、そのつながりを保つ「つな」のこととです。

親と子とのつながりは、もともとあるものですがそれを自覚的に作り上げていくことが、「育児」でもあるのです。

この、きずなを自覚的に作り上げていくことに失敗をさせていただきますと、親と子との人格的な関わりが失われてしまいますし、子どもの人格形成にいろ

いろな問題が生まれて来ます。

×

×

それにしても、何ごとにおいても時期というものがあるように、きずなが形成されるといふことにも時期があることが、研究によって明らかになってまいりました。ある人達は、母子のきずなは生後一時間だと言います。またある人は生後四、五時間であるとも言います。ともかく、わずか一日足らずのあいだの母子の接触で、特に、母親の子どもに対するきずなの基礎が作られるということは、とても興味深いだけでなく、重大なことからです。

ですから、母親は新生児とは出来る限りの接触の時をもつようにしなくてはならないと思えます。その点、昔は各家庭で出産し、母親が二十四時間子どもに接触が出来ました。しかし今日では、ほとんどの者が近代的な医療設備の整った病院で出産し、とかく母子は分離されてしまうようです。それには良い面があるようですが、母子の人格的なきずなの形成の見地からみると、いろいろな問題があるのではないかと思われれるのですが、その点は、専門の方々に教えて頂きたいと思えます。

×

×

さて、新生児の時期はもちろんのこと、生まれて六カ月ぐらまでは子どもはよく眠ります。お乳を

与え、おむつを取り替えて清潔にしても  
らうことで、子どもは快適になり眠りま  
す。その内に、目がさめている時間がふ  
え、手足を動かし、目の前のおもちゃな  
どを見つめて一日を過ごします。

このように、この時期の子どもは、一  
見、お乳を与え、おむつを取り替え、天  
井から玩具のひとつもぶら下げておけば  
よいというものではないのです。たしか  
に乳児は生理的な欲求は満たされ、身体  
は成長して行きます。しかし、それだけ  
では、豚が餌を与えられて大きく成長し  
ていくのと同じであります。

生理的な欲求が満たされるといふこと  
は、とても大切な基本的なことからです  
が、乳児が人間へと成長して行くうえで  
最も大切なことは、どのような態度で、  
その生理的な欲求が満たされるかといふ  
ことです。

先に、母子のきずなの形成が大切であ  
り、それが作られるには時期があると  
申しましたが、乳児期は、母親だけでな  
く、赤ちゃん自身も、そのきずなを持ち

たいと願ひ、それによってこそ赤ちゃん  
の人格は健全に形成されていくのであり  
ます。

乳児、つまり赤ちゃんは、自分の目、  
耳、口、皮膚などで母子のきずなを持  
ちます。

生まれた赤ちゃんはすぐに、母親を  
はじめるといわれます。赤ちゃんの視  
力はせいぜい三十センチ四方しか見えな  
いそうです。ですから、母親がそれ以上  
に遠くになると見えないのです。このこ  
とをお母さんがよく知っておくことは大  
切なことだと思ひます。

でも、赤ちゃんは、お母さんの声は聞  
こえますので、お母さんの声がある方に  
自分を向けようとしています。赤ちゃんは  
お母さんとのきずなをもつことを、一生懸  
命に求めているのです。それによって自  
分を安心させ、強い自分を形成しよう  
としているのです。

さらに、赤ちゃんは、お母さんに抱か  
れることを求めます。それは、お母さん  
に抱かれることにより、身体と身体との

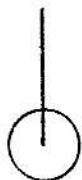
接触、つまりスキンシップを通して、お  
母さんとの強いきずなを結び、自分を安  
心させるのです。その意味で、お母さん  
の胸に抱かれて、その温かさとお乳とを  
身体と心とで頂くことは、赤ちゃんにと  
って、まさに天国で神様の懐に抱かれて  
いるに優るとも決しておとらぬ平安なこ  
となのであります。

そして、このことが、赤ちゃんの人格  
形成にどれほど決定的な善い影響を与え  
ていることかは、母親の想像をはるかに  
超えたことなのであります。

お母さんは、赤ちゃんを自分の胸に優  
しくだいて、次のように祈りましよう。

今わたしに託されたこの子どもの  
身体と魂とが、神さまのご意志の  
ままに、神さまの光りを受け、わ  
たしの手をとおして、豊かに成長  
していきますように。

— つづく —



# 保育べしるみち

発行 左京キリスト教会出版部  
〒606 京都市左京区下鴨南  
茶ノ木町29 ☎781-9640  
振替 京都5-40566  
編集 教会役員会  
印刷 劇片桐整印刷

— 聖書 —  
どんなことにも感謝していなさい

## どのように育てるか

—— 生まれてから —— (二)

松下昌義

皆さんは、人間が行う業の中で最も偉大なことは何だと思われませんか。それは、子どもを生み育てることです。これ以上に偉大な事業はこの世にはありません。

しかし、世の愚かな人々は、このことにまったく気付いていません。子どもを育てることは、暇な者がする事のように思い込み、「私には為さねばならない大切な仕事があります」と、男も女もぬけぬけと言い切ります。

物を造る仕事は、人間を生み育てる業に比べるとまことに小さな業です。子どもを育てる業の偉大さは、神さまの命の創造の業に参加し与るところにあります。その意味で、その神さまの業に直接に与る母親は、それ自体で偉大な者といえましょう。

子どもを育てることを軽くみる者は、人生の終末に於いて、その報いを受け取ることとなります。自

分の人生で一体何を失ったのか、ということをつくづくと思ひ知ることになるでしょう。

子どもを育てることは、人間にとって他のなものにも優る一大事業であることを、もう一度確認しておきたいとおもいます。

さて、幾人もの子どもを生み育てられたお母さんなら、理屈抜きに気付いておられるに違いないと思うことは、子どもというものは、それぞれに違った個性を持って生まれて来るということです。

学者の方は、そのことにいろいろと意見を持ってそれを肯定したり、否定したりいたしますが、理屈はともかく、自分のお腹を痛め、生み育てて来たお母さんは、経験的にそのことを知っておられるようです。

なにごとに対しても敏感に反応する子どもがいます。そういう子どもは、少しの音で目をすぐに覚ます。そして、おむつがぬれると泣き叫んだりします。それに反して、あまり泣くこともなく、おとなしくよく眠り、目が覚めても、きげんよくしているという、所謂、おだやかで育てやすい子どももいます。

乳児期のその子どもの姿は、その子が幼児期になっても同じような傾向を示すものです。いつも何か



を求めて活発に動き、おもちゃの取り合いを他の子どもとして取られたりしようものなら大声で泣き叫んだり、とにかく反応を強く表す傾向をもっていているようです。一方、おだやかな子どもは、他の子どもともいっても、とかく受け身で、相手のするまますを見ているという傾向を示します。

そのようなそれぞれの子どもの反応の傾向は、その子の生まれながらに持っている「素質」であります。そしてその素質が見える形で表れて来たものを、その子の「気質」というのであります。

「気質」はその子どものものであって、その子どもを縛ってしまうものではありません。

「気質だから仕方がないのです」と言ってしまう親がありますが、そのように思い込むことをしてはなりません。

例えば、いろいろな刺激に対して敏感であったり、強く反応をする気質を持っている子どもであるならば、親は、その子どもの特性をよく心得て、ことさらに

それを困ったこととしないで、むしろそのような気質を、その子どもの特長であり、良い面、つまり神さまが、その子どもに与えてくださった「よい賜物」であると心得て、それをよく生かすことができるような育て方をしなくてはなりません。

多くのお母さんのお話を聞いていて何時も思うことは、その子どもが特長として持っているものを、積極的に誉めるお母さんがとても少ないということです。

「困った、困った」と言います。そして、自分の思う通りの子どもになっほしいと願うのです。そして、そのようにならなければ、「心配だ。困ったことだ」と思ってしまうのです。このことはお母さんだけでなくお父さんも同じように思い、さらに、幼稚園や学校の先生までもそのように考えてしまうならば、それこそ「まことに困ったこと」であると言えます。

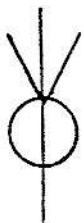
何事に於いても言えることですが、そ

の特長は「良い面」でもあり「悪い面」でもあるのです。このことを確りと心得ておくことはとても大切であります。

その「良い面」を育てることが育児であり、教育するということです。

例えば、気が強く、自己顕示欲の強い子どもは、そのまま、親が何でも受け入れていきますと、ますます気が強くなり、自分を一番にしてくれなければ怒り出す子になってしまいます。だと言って、むりやりに押さえつけるとか、厳しい罰をあたえるとかいたしますと、根みや敵意をその子どもに植えつけ、その子どもは反抗的、拒否的な性向を身につけてしまいます。

このような場合どうすればよく育てられるのでしょうか。こうしたことについて来月号では、具体的に考えてみましょう。



— つづく —

# 保育るべしみる

1990. 7 No. 15

発行 左京キリスト教会出版部  
〒606 京都市左京区下鴨南  
茶ノ木町 29 電話781-9640  
振替 京都5-40566  
編集 教会役員会  
印刷 片桐整印刷

アポロは植え、パウロは水注ぎ、育て給うは神である  
—— 聖書 ——

## どのように育てるか

—— 生まれてから —— (三)

松下昌義

子どもというものを見ていますと、たえず動いています。「よくも、これだけ動けるものだ」と感心してしまいます。

誰からか「動きなさい」と指示されたわけでもないのに次から次へと身体を動かしていきます。

それにしても、一体誰が動かしているのでしょうか。子ども自身が「動かさねばならない」と思い自覚して動かしているならば、子どもは仕事を無理にしているような気持ちになって、ついには身心とも疲れ果て病気になるてしましましょう。

実は、子ども自身も動かされているのです。では子どもをどのように動かしているのは何なのでしょう。それは、子どもの内にある大宇宙の生命意志なのであります。これを「神の意志」と言い換えても、決して間違いだとは言えません。(意志の働きについては「みちしるべ」昨年度の四月号以下に少し記しておきましたので、興味のある方はご覧ください)

さい)

子どもは、その時に適って、それに相応しい行動をしていきます。這うときが来たら一生懸命に這いだします。立ち上がる時が来ますと転んでも転んでも立ち上がります。そのエネルギーは驚くべきことだと、ただただ感心するばかりです。

ですから、子どもをより良く育てるためには、子どもの内に秘められている大宇宙の生命意志、つまり「神の意志」の働きを、謙虚な心で確りと知っておくことが最も肝要なことでもあります。

さて、赤ちゃんが成長していく段階で、何でもつかみ、口に入れてなめたり、手でひっぱったり、振ったりする時期があります。これもそのようにするに相応しい時期がきたので、内なる生命意志がそのような行動へと赤ちゃんを導き促しているのです。

それは、よりよく赤ちゃんが自分の外の世界に適応していくために必要なことを身にとり入れる作業をしているのであります。

それはどのような味をしているか、回いものか、柔らかいものか、それともどんな音がするか試しているわけです。そうすることによって、赤ちゃんの感覚が刺激され、見たり触れたりするものの意味を

発見していくのです。

ですから、そのような行動を赤ちゃんがしようとするとき、周りの大人は、それを止めたり、あぶないからとか、汚いからとかの理由で、触れさせないようにしてしまうことは、折角の赤ちゃんの探索行動を邪魔することになり、正しい成長を阻害することになります。そればかりか、好奇心をおさえつけ、知的探究心を失わせてしまうことになるのです。

ですから、親はできる限り、赤ちゃんの好奇心を満足させ、探索行動をあたたく見守ってあげることが大切であります。

このような赤ちゃんの探索行動による学習の意味を理解しない親は、ときとして、赤ちゃんの周囲からすべてを取り去って、人形のように、完全に整った部屋に静かに置いておくことが、赤ちゃんを大切にすることであり、親の愛情だと思いがちです。しかし、それは子どもの成長を、親の押しつけの愛情で邪魔をしていることになるのだと言ったことを、もう一度確認しておきたいと思いま

す。

× ×

子どもの探索行動について、ついでながら言っておきますと、子どもが言葉をよく話すことが出来るようになりだしますと、「これは何」と質問をするようになります。このようなことは三才頃から始まり六才頃まで盛んにつづきます。この時期を一般に「質問期」と言われているようですが、とにかく、この質問も赤ちゃんが行なった『探索行動』の一つなのであります。つまり、口や手の感覚だけで試して、それらのものを調べ自分の身に取り入れる行動が、言葉が出来るようになって、言葉による『探索』をするようになったわけです。

ですから、そのような時には、優しくその子供に相応しく、つまり分かる範囲で答えてあげるなら、子どもの好奇心は満たされ、したがって、知的な働きにもよい刺激になるのであります。(子どもは質問にはどのようなようにこたえるべきか、ということについては、いずれ、ご一緒に考えたいと思っております)

× ×

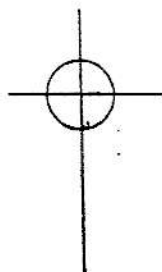
私は今、私たちの内に働く宇宙の生命意志について、あらためて長敬を覚えていきます。

人間をはるかに超えた、偉大なる意志の働き、それは神の愛と言えます。

この神の愛が、すべてのもののうえに降り注ぎ、すべてを生かし、動かし、育てはぐくみ、それらしく光り輝かせる働きをしているのです。

このことに気づくとき、ありがたさが自分の身体全体に漲ってきます。

すべての子どもたちよ 神の愛のもとで光り輝いてください。  
だれもそれを妨げるような愚かはいたしません。  
神さま、よろしくおねがいたします。



# 保育べしるみち

1990.8 No.16

発行 左京キリスト教会出版部  
〒606 京都市左京区下鴨南  
茶ノ木町29 ☎781-9640  
振替 京都5-40566  
編集 教会役員会  
印刷 片桐軽印刷

神のみまえに 心を安んじていよう

— 聖書 —

## どのように育てるか

— 生まれてから — (四)

松下昌義

赤ちゃんの笑顔ほど可愛いものはありません。赤ちゃんの笑顔は、それを見る大人たちの心を和ませてください。お母さんは、笑顔の赤ちゃんを見つめるとき、時間が過ぎるのを忘れてしまいます。

「微笑っている。この子が微笑っている」と、生まれて間もない赤ちゃんの寝顔を見て、お母さんが感動している姿をよく見かけます。

赤ちゃんが、まどろみのうちに、口角をほんの少しひきつける微笑み、これを「自発的的微笑」と一般に言われています。

この微笑みは、だいたい生まれて一か月までの間に生じて来るようです。それは、赤ちゃんの内から自然に発生して来る微笑みなので、「自発的的微笑」といわれるのでしよう。

乳幼児のことを研究している学者さんは、この微笑みについて、いろいろなことを私たちに教えてくれますが、それはともかくとして、私はこの微笑み

は赤ちゃんの「魂の微笑み」だと思っています。

赤ちゃんの「魂の微笑み」は天使の微笑みのようであり、モナリザの微笑みのようであり、また弥勒菩薩の微笑みに通じます。

人間がその一番深くに頂いている神さまの命の美しさと真とが、ほうふつと浮かび上がってきたものが「魂の微笑み」なのでしょう。この微笑みは、私たちの内にある神さまに通じる魂のまどろみを呼び覚ます働きをします。ですから、その微笑みを見る者は、安らぎをおぼえるのでしょうか。

事実、この赤ちゃんの微笑みは、大人たちに対する呼びかけとしての働きをもつのです。それによって赤ちゃんのもとに来た大人たちに、今度は自覚的な微笑みをもって赤ちゃんは答え、働きかけてくるようになるのです。それが生後二か月頃から始まります。

お母さんは、その可愛さに魅せられて微笑み返します。また、優しく語り返します。そのお母さんの顔と声と感触を受けて赤ちゃんは微笑みかえし、ときとして、声をたてて笑うようになります。

このことは、赤ちゃんが自分のそとのものとの関わりを持ち始めるきっかけになるのです。ですから

この微笑みを「社会的微笑み」とよばれるのです。

このような赤ちゃんの「社会的微笑み」は、やがて生後五、六か月頃になりますと「選択的微笑み」とよばれるものに発達していきます。

× ×  
赤ちゃんのこのような発達は、自然におこるものではないようです。「魂の微笑み」は、赤ちゃんの内なる魂の促しで自ずと生まれてくることですが、社会的微笑みは、人の声や顔に赤ちゃんが反応して起こってくるのです。ですから、魂の微笑みをなげかけている赤ちゃんを、周囲の大人が無視して応えてあげないと社会的微笑みは赤ちゃんの内に育たないといわれます。これは、ただ微笑みが生まれ来ないというだけではなく、その赤ちゃんの情緒の発達に重大な影響をあたえることになるのであります。

× ×  
かつて一時期、「ホスピタリズム」ということが育児問題として盛んに論じられたことがあります。

「ホスピタリズム」とは「施設病」とも訳されているようですが、それは、ある特別な乳児の施設に、長期にわたって預けられている赤ちゃんに生じたいろいろな問題、特に、人間関係を作る能力の発達の遅れ、情緒のあらわれ方の異常、社会的行動の異常の問題です。

× ×  
結局、それらの問題は、沢山の赤ちゃんを一括して機械的に育てるような育児態度のなかから生まれてきたものなのです。たとえば、赤ちゃんとの一対一の密接な関わり不足、その時間が来なければ、泣いてもそのままに放置して、おむつの取り替えも授乳もしない。極端になりますと、語りかけも微笑みの顔も赤ちゃんに向けず、機械的につぎつぎと哺乳瓶を与え、おむつを取り替えて終わり、といった育児態度から生じた問題です。

× ×  
赤ちゃんはおむつが濡れ、不快感を感じた時には、それを訴えるためにむずかしく泣きます。それにお母さんや大人が応えてあげることによって、人間を信頼する心や感情を自分の内に育てていくのです。

「まあ、気持ちが変わるかったでしょう、いま直ぐに取り替えてあげますからね」というお母さんの笑顔を目の当たりに見、優しい語りかけの声を聞くことよって、赤ちゃんの身も魂も心も豊かにゆたかに育って行くのです。こうして「社会的微笑み」は増し、その内に、自分を最もよく世話してくれるお母さんにだけ微笑みをするようになるのです。これが「選択的微笑み」であります。

× ×  
赤ちゃんが、人として身心ともに健康に育っていく為には無くてはならないことは「愛」です。愛の目なごし、愛の語りかけ、愛のスキンシップ。そして、最も大切なことは、神さまに対する祈り心であります。

× ×  
天地を創造し それを保ち  
完成なされる神さま  
与えたもうた 私たちの子どもを  
わたしたちが 愛をもって  
育てられますように お守り下さい

# 保育るべしるみ

1990. 9. No17

発行 左京キリスト教会出版部  
〒606 京都市左京区下鴨南  
茶ノ木町29 ☎781-9640  
振替 京都5-40566  
編集 教会役員会  
印刷 片桐整印刷

神は人の思いを知り、心を正しく見抜き、  
人の言葉をすべて聞いておられる。

— 聖書 —

どのように育てるか

— 生まれてから — (五)

松下昌義

赤ちゃんはこの世に生まれ出るとすぐに、唇にふれるものがあると反射的に吸いつきます。これを「吸いつき反射」と言うようですが、このような本能的、または生得的になされる業は、神様による大宇宙に働く意志が人に及んでなされることなのであります。それを、「〇〇反射」とか「生得的、本能的な活動または欲求行動」などという表現で分かたかのように思うのは、如何なものかとおもいます。

このように赤ちゃんはお母さんの乳を吸うことを繰り返しているあいだに、上手にすることが出来るようになります、与えるお母さんも上手にあたえることができるようになって来ます。そして、赤ちゃんはやがて、お母さんが抱き上げてくれれば乳があたえられることを知るようになります、お腹が空いて泣いていても、抱き上げられれば泣かなくなります。

このような繰り返しを通して、赤ちゃんは人を信頼する感情を豊かに身につけていき、特に母子の絆を強くしていくのです。

それにしても、赤ちゃんに一日何回授乳をすればよいのでしょうか。これについては、今まで多くの専門家の意見があり、そのときそのときの育児書により見解が変わってききましたが、それは大体二つの意見に分かれています。一つは規則正しく時間を決めて与える。いま一つは、その赤ちゃんの様子を見て、空腹になれば与えるという二通りであります。この場合、お母さんがしっかりと知っておくべきことは、赤ちゃんに乳を与えるのは、空腹を満たし栄養を与える為だけではないということです。自動車にガソリンを入れるのとは違います。

赤ちゃんがお母さんのお乳を吸うことは、生理的な空腹を満たし肉体に栄養を摂取しているだけのことではないのです。乳を吸うことによって赤ちゃんは、お母さんから愛情を吸い、その心と肉体に摂取しているのです。このことを、お母さんはしっかりと心得ておかねばなりません。ですから、授乳するときには、赤ちゃんを優しく抱き、スキンシップをしながら、乳房を確りと含ませ、目を見つめ、優しく語りかけてあげることが大切です。そのとき、お母さんは、何時も心の一番深いところで、自分の祈りの言葉を持っていることです。

たとえば、次のような祈りです。

神さま、ありがとうございます。

どうかこの子供の魂と肉体とが

あなたさまの導きによって

神さまの世界に向かって

健やかに成長して行きますように

に

そのために、私をゆたかにお導

きください。

イエスさまよろしくお願いいた

します。

×

×

授乳するとき、お母さんは自分の都合

のみを考えてはなりません。赤ちゃ

んの側に立って考えてあげることが必要

です。

今日の若いお母さんは、自分の好みで

赤ちゃんを人形のように取り扱いがちで

す。赤ちゃんを自動車の中に放置し、自

分はパチンコゲームに熱中していて、そ

の結果、不幸なことが起こってしまった

などというニュースを新聞などで見かけ

ます。

それはともかく、あまり度々授乳をし

ますと、胃に休みの時を与えられないの

で、かえって、良くないと言われていま

す。その結果、普通の赤ちゃんの場合で

すと、だいたい三時間間隔であたえる方

が最もよいのではないかといわれたりも

いたします。

×

×

先程、授乳において赤ちゃんは愛情を

も吸うのだ、と申しましたが、特に赤ち

ゃんの場合、その愛情を自分に摂取する

ところは、唇だと言われます。したがっ

て新生児の場合、乳を吸う求めとともに

唇で愛情を吸う求めを十分に満たしてあ

げることが絶対にわすれてはなりません。

唇を通して、愛情を赤ちゃんが十分に

受けていないと、乳は十分に飲んだはず

なのに、何時までも落ち着くことなく、

いらいらしていることとなります。

しかし、愛情も乳も共に十分に摂取取

ってきた赤ちゃんは、大きな平安の内に寝入

ってしまいます。

私たちは、とかく子供の外面ばかりを

見てしまいます。体重とか身長とか、何

がどれほど出来るようになったとか。

勿論、それは、その子供の健康状態や

発育の状態を知るうえでとても大切なこ

とであります。しかし、人には外側から

は見る事が出来ない、その者の魂の世

界、精神の世界、心の世界というものが

あります。それらは、身体の成長と同じ

ように日々育っていくことを願っている

のです。特に、幼い者の魂や精神は、

よりよく育つことを熱烈に求めているの

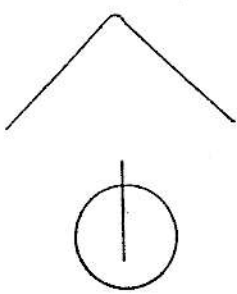
です。親はその求めに応えてあげる責任

があります。

先に紹介しました祈りの心をもって、

優しい言葉、安心の言葉をたくさん赤ち

ゃんの魂に注ぎこんであげましょう。



# 保育るべしみる

1990.10 No.18

発行 左京キリスト教会出版部  
〒606 京都市左京区下鴨南  
茶ノ木町29 電話781-9640  
振替 京都5-40566  
編集 教会役員会  
印刷 片桐軽印刷

愛はすべてをむすぶ帯である — 聖書 —

## どのように育てるか

— 生まれてから — (六)

松下昌義

お母さんが抱かないと泣き止まない赤ちゃんを見て、「この赤ちゃんは抱き癖がついてしまった」と思う方がありますが、実はそうではないのです。

もともと赤ちゃんは、自分を安心して任せることが出来る者を求めているのです。

「抱き癖」をつけてしまったから、抱かれると泣き止むのではなく、自分を任せ、依存できるもの自分が得られたので安心して泣かなくなるのです。

× ×

普通、赤ちゃんは二カ月ぐらいになりますと、自分が依存して安心できる者を知ようになります。それはお母さんです。そして、泣いているときに人が来ると泣き止み、あやしてあげると泣くのを止めるが、人が離れると泣くというようになります。そして、五ヶ月ほどになりますと部屋に誰もいなくなると泣き、遂に、泣いているときでも、お母さんが抱かないと泣き止まない。というようになると言わ

れています。このことは、実際に育児をしておいでになるお母さんが体験的によく知っておられることです。

× ×

これらの事は、赤ちゃんという者が、「抱き癖」とか「泣き癖」とかの「癖」でそうなるのではなく赤ちゃん自身の内に、自分を安心させたいという求めがあって、お母さんへのなつきやくつき現象が起こってくるのです。そして、この時期に十分にその求めを満たしておいてあげることが、その後の赤ちゃんの人格形成に重要な影響を残すのであります。

赤ちゃんは肉体の栄養を与えられさえすれば、自然に育って行くものではありません。常に、親が子どもとの動きかけ、求め、訴え、願いに応えてあげるという絆を確りと保つことによって、はじめて赤ちゃんは健全な人に育っていくのであります。

× ×

赤ちゃんは、六ヶ月ほどになりますと普通「人見知り」という現象が現れて来ます。

知らない人にあやされたりすると、その人の顔をじっと見つめていて急に泣き出したりして、あやした方もそのお母さんも困ってしまうということがあります。



ところが、「うちの子は人見知り（ひとみしり）をしないのよ」と、少し誇らしげに言うお母さんがおられます。

しかし、人見知りをしない赤ちゃんが必ずしも良いとはいえません。

赤ちゃんが人見知りをしない原因にはいろいろな事情があって、すぐに、それを良い悪いということはできませんが、ただ、人見知りをすることは、一般的に言って、その赤ちゃんがとても健全に育っているのだと言えます。

× ×

赤ちゃんが人見知りをするということは、一口に言えば自分がなつき安心出来る者を持っているということであり、さらに、そうでない者との違いがわかる判断ができる能力を持ち始めたということでもあります。

赤ちゃんが成長して行く段階で、赤ちゃんが自分を任せ、なつき、くっつくことが出来る者が必要なのです。それを、一生懸命に求め、自分の根っこにもちたいと願っているのが赤ちゃんなのであります。

それを自分の内にもつことによって、

情緒の安定と、物事に対する積極性と社会のいろいろな事柄にたいする適応性を、培う土台をえることになるのです。

ですから、人見知りをするようになった赤ちゃんは、お母さんとの結びつきが出来たという印であります。したがって吾が子のひと見知り現象を、お母さんはよろこび感謝すべきなのであります。

ひと見知りは、二才頃の子どもにもおこります。これを「第二次人見知り期」とも言います。ですから、その時にも切り離そうとしないで、親子の絆（きずな）をより強くできる時と考えて、受け入れてあげることがよいと思えます。

× ×

それに致しましても、乳児期という時期の子どもの心の内は特に知ることが出来ません。

この時期に大切なことは、親子の絆（きずな）をしっかりとすることです。

そのきずなとは愛です。思いやりです。安心を与えてあげることです。信頼することを行動をもって教えてあげることです。

す。

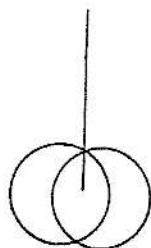
さらに、大切なことは、親子が共に見えない絶対者、つまり、神さまにお祈りすることを教えてあげることです。

早くから数や文字を教えることに熱心になり、理屈でものごとを考えることにのみ関心をよせて、肝心の安心の根っこを子どもにも与えないとするならば、そのようにして育てられた子供は、落ち着きがなく、不安定で、時として、凶暴な行動に走る子供になってしまいます。

子供はおとな以上に、自分の魂の拠り所を熱心に願っているのです。その求めに応じてこそ人間の親であります。子育ては、親自身が育てこそ完成される業（わざ）だともいえます。

神さま、吾が子とともに、親も育つことができまますように。

よろしくお願いいたします。



# 保育べしるみち

1990.11 No. 19

発行 左京キリスト教会出版部  
〒606 京都市左京区下鴨南  
茶ノ木町29 電話781-9640  
振替 京都5-40566  
編集 教会役員会  
印刷 片桐経印刷

神を信じなさい。 — 聖書 —

## どのように育てるか

— 生まれてから — (七)

松下昌義

私たちにはいろいろな欲求があります。生理的な欲求、安全や安心の欲求、社会的な欲求、自我の欲求、自己実現の欲求などがあげられます。これらの一つ一つについては、少しずつ考えていきたいと思っていますが、これらの欲求が私たちに備わっているのです、私たちは生きて行けるのです。例えば、食物を飲食したいという欲求がなければ、私たちは生きていくことは出来ません。排泄をしたいという欲求がなければ、私たちは死んでしまうでしょう。また休息したいとか、眠りたいという欲求がなければ私たちの身体は弱り果て死んでしまいます。

× ×  
私たちは、自分に備わっているいろいろな欲求について、反省的に考えることをしません。それは、欲求というものが、自分にとってあまりにも身近にあり、自分の自覚的な意志とは関係なく自分の身に初めから備わっているのです、当たり前のこととして

あらためて考えようとはしないのでしよう。しかし、私たちにさまざまな欲求が備わっているからこそ、私たちは生きることができなのです。そのことに気付くなら、欲求が備わっていることほど有難いことは他にないといえます。

では、その欲求は何処から来るのでしょうか。それは、命と共に神の意志として万物のもとへ来るのです。

× ×  
欲求とは、生きる意志です。生きる意志は生命力です。生命力は神による愛の現れであります。

× ×  
神の愛の現れである生命力が、神から来て母体に宿ることが妊娠することであります。

「神は、人を土で造り、それに命の息を吹き入れられると、人は生きる者となった」と、聖書にありますが、「命の息」とは、神の霊ということでありそれは生きることへの意志でもあります。

× ×  
私たちに神さまが備えてくださった欲求は、段階的に現れてきます。そして、欲求の完成は、先にも記しましたが自己実現の欲求にあります。

自己実現の欲求とは、自分の能力をいっばいに出してみたいという欲求です。私たちは、自分自身の可能性を思い切り出せた、と思うとき本当の満足感

と安心と喜びとを得るのです。自分自身の可能性を出すとは、自分をまるまる出すことです。それは自分の内にはたらく意志の力をすべて出し切るということであり、そして、それは創造的な行いとなるのであります。

× ×  
 教育するということは、その者に何かを植えつけることではありません。その人の内にあるものを引っ張り出して育ててあげることです。

育児においてもこの原則は絶対に守らなければなりません。

その子どもの内にある、そのもの自身を、よく実現させてやるようにしてあげることが、もっとも優れた育児の方法なのであります。

子どもが自分でしたいという思いをもつのは、結局、自己を実現したいという思いなのであります。それが欲求ということの内容です。

五か月ほどになりますと、自分で側にあるものをつかもうとします。また七か月ほどになりますと、自分で食べよ

うとするようになります。そうして、一年もたつと、手伝ってもらうことを嫌い自分でしたいと思うようになり、三才にもなると、その欲求が強くなり現れてきます。このような欲求を一般に自立への欲求と言われています。

× ×  
 自分ひとりで出来るようになりたいという自立への欲求は、なんと驚くべき生命力であることでしょう。しかも、よりよく自分で行いたいという欲求は、なんと素晴らしい意志力でしょうか。これは神さまが備えてくださった命の滾りなのです。霊的な息吹なのであります。

× ×  
 さて、欲求というものが、神さまによって備えられていることは素晴らしいことなのですが、それだけに、その欲求を上手に使わせて頂くようにならなければなりません。子どもは未だ、それを上手に使うことが出来ません。そこで、その使い方を身につけさせてやること、「しつけ」ということなのです。

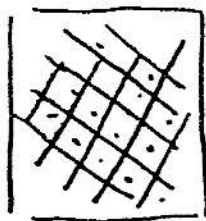
「しつけ」といいますと行儀作法を身につけることを連想してしまいがちです

が、そればかりではなく、生きて行くうえでのごとに対する身の処し方のことでもあります。

たとえば、子どもが持っている欲求がいつも全部満たされるといふことはありません。ときには待ち、ときには我慢をしなければならず、自分で努力して克服しなくてはなりません。その時、よく考えねばならず、何かを造りださねばならないこともあるわけです。

そのように、さまざまな事柄に自分を上手に適応し対処出来る知恵や努力ができるようにしてあげることが「しつけ」をするというのであります。

次号より、以上のことをふまえて、三才までの幼児について、ご一緒に考えてまいりたいとおもいます。



# 保育るべしるみち

1990.12 No.20

発行 左京キリスト教会出版部  
〒606 京都市左京区下鴨南  
茶ノ木町29 電話781-9640  
編集 京都5-40566  
印刷 教会役員会  
刷 片桐軽印刷

— 聖書 —  
神の愛の内になさい

## どのように育てるか

— 生まれてから — (八)

松 下 昌 義

この世に生まれ出たものは、それがどのようなものであっても、一生懸命に成長しようといえます。その姿はいじらしく、感動的です。神の意志に、その根っこをもつ生命意志というものの素清らしさをしみじみと感じます。

赤ちゃんも同じです。一生懸命に成長しようという生命意志のうながしにこたえて、赤ちゃんはがんばります。

赤ちゃんに於いて、成長しようということは、この世に適応しようということであり、育てる両親からすれば、人の社会に適応できる人となってもらうということなのです。

赤ちゃんは、先ず、自分がこの世に適応し、独り立ちするように、生命意志によって促されます。

ですから、赤ちゃんのすることは、どのようなことでも、決して無意味なことではないのです。

例えば、赤ちゃんがこの世で生きていく上で大切なことの一つは、食べる、ということなのです。

一才の誕生日も過ぎて、離乳食も大方終わりますと、所謂、食事をするようになります。

家族の一員として、テーブルに席をつくってもらい、自分のお茶碗などの食器がそなえられます。テーブルを前にして座っている赤ちゃんは、みんなの注目の的となり、王子さま、お姫さまのようにみえます。そこには、家族が居る、という風景があり、平和と喜びとがただよいます。

しかし、その雰囲気も束の間、お母さんたちが少し油断をしている間に、たいへんなことが起こります。赤ちゃんの前にあったものが、倒れたり、こぼれたり、まきちらかされたりして、大騒ぎになるという光景は、どのお母さんも経験することです。

はやい子どもは、一才半にもなれば箸を使うことができるようになりますが、だいたい、スプーンを用いる子どもがおおいようです。

食事の状況を見ていると、食べさせてもらうにしても、食べ始めは、おとなしく食べていますが、しばらくすると、たべることよりも、スプーンですくったたべものを振り回したりするようになります。また、口に食べさせてもらったものを、吐き出したり

するようにになります。お母さんは、「だめですよ。食べましょう」と、注意を与えますが、すぐにまた、おなじようなことをしてしまいます。

これは、お腹が満腹になって、食べることから関心が他に移っていったのであるようにするのです。つまり、遊びはじめるのです。

× ×  
 幼児にとって、遊び、ということとは、大人が考えているような無駄なことではないのです。言わば、幼児にとって遊びとは、学習することなのであります。

一才も過ぎると、身体、特に手はわりかた自由に使えるようになります。そこで、その自由に使える手の動きを楽しみおもしろがって、さまざまな動作をするようになるのです。

そのようにすることによって、ますます手の動作が、複雑にできるようになるのです。また、何かをつかんだり、触れたり、ひっくりかえしたり、たたいたり、ときどきは、口に持っていったり、とかくいろいろな動作をいたします。こ

れは大人からみれば、いたずらをしているように思えますが、けっしてそうではありません。

そのようにすることによって、その子は、その物を確かめているのです。

「あっ、これは堅いな」「これは丸いな」「これは冷たいな」「これは熱いな」「これは……」

というふうな、一つ一つ言葉では表現できませんが、確かに子どもは感じ取って学習をしているのです。

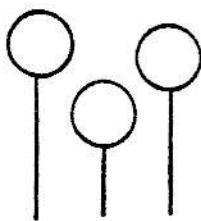
大人は、このことをよく知らないのです。子どもに、そのような体験を全くさせないようになってしまうと、子どもはよく生きて行くうえでの、大切なものを自分にもつことができなくなるのです。

そこで、食事のしつけをしながら、ある程度は、遊ばせてあげることが必要なのです。

もうひとつ注意しておかなくてはならないことは、いたずらをしているように見えるそれは、その実、子どもが自分でやろうという気の現れなのだ、ということとです。

自立への意志の表れといったらよいでしょうか。自分でしたい、やりたいという気持ちは育ててあげなくてはなりません。しかし、一方において、食事と言うもののしつけがありますので、そのかねあいとはとても大切です。

× ×  
 この年令の食事への対処の仕方は、次の号で、もうすこし学びたいとおもいますが、最後に大切なことは、食事への感謝と祈りとを、大人たちが忘れてはならないことです。子どもが分かって分らないことなく、祈りと感謝とをする時、子どもの魂にその姿と思いが滲み込んでいくのです。そのような食卓は、子ども達の魂に栄養を備える、祝福の場となるのです。



# 保育るべき

1991. 1 No. 21

発行 左京キリスト教会出版部  
〒606 京都市左京区下鴨南  
茶ノ木町29 電話781-9640  
振替 京都5-40566  
編集 教会役員会  
印刷 片桐整印刷

わたしの平安をあなたに与える

—イエスの言葉—

## どのように育てるか

—生まれてから— (九)

松下昌義

子どもは成長し、発達し、つ、つある者です。これは当然のことなのですが、ときに、親は子どもを大人の小型のように思ってしまうことがあります。

なにかを教えようとするとき、特別にその時間だけを学習の時間としなければならぬとか、理屈ばかり話すとか、その他知らない内に、大人の小型に對するように関わってしまい、それが育てることだと思ふのです。

しかし、子どもは決して大人の小型なのではなくすべてにおいて子どもは小さければ小さいほど未熟なのであります。未熟ということは、すべてのことが初めての事ばかり、ということなのです。つまり、自分という内容が空っぽだということです。

そこで、自分に内容を与えて行かなければならぬいわけで、一生懸命に自分に内容を与える為、外のものを受け入れようと努力するのです。

×

×

では、子どもはどのような努力をするのかと言いますと、それは、自分の身近にいる者の真似しをするということなのです。つまり、身近に居る者の模倣をすることによって、自分に内容を得ようと努力するのです。

その場合、子どもは、見て真似るといっただけではなく、聞いて真似るといっこともいたします。

例えば、お母さんやお父さんのさまざま仕度だけではなく、その語り口までそっくりに模倣するのです。

×

×

よく、親子だから似ているといわれます。勿論、親の遣任子をひきついでいるのが子どもですから、親に似るということはとうぜんなのですが、そればかりではなく、親の一つ一つの仕度や語り方、発声の仕方まで模倣しているのが多分に似るということもあるのです。

と、考えてきますと、子どもを育てるといっことは、特別になにかの時間に、なにかを教え込ますことによつて、その子どもが成長し発達していくのではなく、日常の生活のすべての時間に、子どもは身近な親の仕種を見聞きし、それを模倣することによつて、自分を造り上げているのです。そして、その努力たるや、まことに真剣なのであります。子ども

は親の言動をしつかりと見て育ちつつあるのです。

× ×  
ところで、模倣についてもうひとつ知っておくべきことは、子どもが模倣をするとき、必ずしも身近にいるものなればすべてその真似をするということではなく、子どもが成長していくにつれて、自分を愛してくれる人、従って、尊敬出来る人の模倣をするようになるということです。

× ×  
子どもは自分を造りあげて行くことにとっても真剣であるとううしましたが、その願いと努力とを、親たるものははっきりと知っておくべきであります。ですから、子どもは、模倣すべき者を一生懸命に求め、ついには、物語りのなかに登場する人物に、自分が模倣すべき理想の姿を求めるといふことがあるのです。

× ×  
子どもが健全に育っていくためには、どうしても健全な模倣すべき者が、その身近に必要なのであります。特に、このことは、小学生の年代になるときに必要に

なっておりまゝです。ですから、この年齢に達すると、偉人伝などの読み物を好んで求め読むようになるのです。

× ×  
とにかく、人が子どもを与えられて親になるとき、子どもから鋭く、親の生き方を問われることになるのです。つまり子どもに模倣されるに相応しい生き方をしているかということなのです。

× ×  
謂うならば、子どもは、「お父さんお母さん、わたしが私を造るために模倣するに値する者であってください」と叫び求めているのであります。

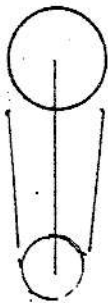
× ×  
それにしても、子どもにどうしても教え、与えておいてやらねばならないことがあります。それは、人を超えた超越者つまり、神さまです。

× ×  
では、なぜそれが必要なのかと申しますと、本来、目に見えない世界の広がり、に生きているのが、子どもの世界だからです。目に見える世界は大人の世界です。大人とは、それほど狭く限定された薄っぺらな世界に生きる者になってしまつた

のです。そのような人間にしてしまうことは、子供をある意味では殺してしまうことになるのです。

× ×  
子どもを本当に大きく、健全な人間として育てるためには、子どもの思いの世界を、この世の目に見える世界を遙かに超えた永遠の世界、聖なる世界にまで羽ばたかせてやることによって、本当に人間として偉大なるものとなることのできるのであります。

× ×  
この世を超えた聖なる世界に子どもの心と思いを向け、繋げることが出来る絵本を見せ、聞かせてあげることが出来ます。と同時に、祈ることを模倣させてあげましょう。かならずそれは、その子どもの一生の宝となるでしょう。



# 保育べしるみち

1991. 2 No. 22

発行 左京キリスト教会出版部  
〒606 京都市左京区下鴨南  
茶ノ木町29 電話781-9640  
振替 京都5-40566  
編集 教会役員会  
印刷 片桐軽印刷

愛はすべてを結ぶ帯である

— 聖 書 —

## どのように育てるか

— 生まれてから — (十)

松 下 昌 義

今月は言葉の発達について考えてみましょう。  
一般に言葉の数は一才半で百前後、二才になりま  
すと二百程、そうして三才になりますと急に多く  
なり、幼児として普通の生活に一応不自由しない  
程度の言葉数を身につけるようになります。

×

×

私たちはひよっとすると、子供は言葉を自然に  
身につけていくものだと思っていけないでしょうか。  
もし、そのように思っていらいっしやるなら、そ  
の考えは間違っています。

子供が言葉をしっかりと自分のものとしていく  
ために前提となることは、一般に母と子との人間  
関係の絆が信頼と愛情とで結ばれていることが大  
切なことなのです。

×

×

だれでも、自分という者の存在を知るためには  
どうしても、自分と関わってくれる者との関係を  
結ばねばなりません。

このことを具体的に申しますと、一般に子供が

深く関わりを持つ者はお母さんです。お母さんに  
いろいろと世話をしてもらうことによって、子供  
は、お母さんという存在に深く気づくようになり  
ます。気づくとは、お母さんの声、足音、抱き方  
姿すがた貌がたその他のさまざまなことを通して、お母さ  
んという対象を認識するということです。そして  
その認識の度合どあひいは、やがて、お母さんの足音を  
聞き、声を聞いただけで、子供はお母さんという  
存在を心の内に思い浮かべることができるよう  
なるのです。

優しいお母さんを自分の心の内に対象的に思い  
描くことができるようになったとき、初めて、自  
分という存在が生まれてくるのだと言えます。つ  
まり、それは、自分がお母さんを自分の心の内に  
思い描けた。ということになるのです。お母さん  
を、自分の心の内で思い描けたことは、自分とお母  
さんとの関係が、はつきりと生じたということ、す  
その時、初めて、「お母さん」という言葉がそ  
のこどもの中に生まれてくるようになるのです。

×

×

少し理屈っぽくなりましたが、このことを知っ  
ておくことはとても大切なことです。

言葉というものは、必ずその言葉のうらさけが  
必要です。



「お母さん」といっても、その言葉に「お母さん」というイメージが伴わなければ、その言葉には全く意味がありません。また、それは言葉としての働きをいたしません。

このように、子供が自分の見たものは、別に、それを自分の内に思い描くことが出来る切っ掛けを、子供に与えるのは、お母さんとの関わりにおいて得た信頼を基礎としているのです。

X X

子供が自分の外の世界に安心して関わって行き、それを見、それに触れ、それを自分の内に取り入れ、それを言葉でできるようになるためには、先ずお母さんとの強い信頼の結びつきが必要です。例えば、子供とお母さんが、人形で遊んでいる場合、お母さんが人形を抱き上げて、「可愛い、可愛い」と愛撫する仕種しぐさをしなから、人形を子供に与えますと子供は人形を取り上げて、はじめは捨てるかも知れませんが、何度も、お母さんが同じ仕種をしているうちに、それを見ていた子供は、お母さんと共に人形に関

わるさまでさまざまな仕種の感覚的な経験をすることによって、人形とはどのような者なのかということを知りたいようになります。そして、「にんぎょさん、なぜ、なぜ」と言いながら、何度も何度も愛撫して、人形を子供に手渡すなら、子供は、お母さんと同じように、人形を「なぜ、なぜ」する仕種をするようになると共に、「にんぎょ」という言語と「人形」とが一つとなり、その結果、子供の心の内に「にんぎょ」という言語の概念がた、つまり「にんぎょ」という言葉がつくられるのです。そうすることによって、「にんぎょ」が目の前になくても、「にんぎょ」と言えば、子供はオモチャ箱にある「にんぎょ」をとりに行き、持ってくるようになり、更に「にんぎょ」が欲しいときには「にんぎょ」と言うことが出来るようになるのです。

X X

世のお母さん方のなかには、子供に言葉を教えようとして、あたかも、学校の授業のような指導の仕方をする人がいら

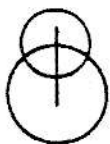
っしゃいます。しかし、そのような仕方では、子供は言葉を安心して自分のものとする事ができなとおもいます。

言葉の習得だけでなく、どのような場合においても、大切なことは、先ず信頼と愛情の絆ゆかりを基礎として、なにごと始めるなら、こどもは必ず、それを自分の内深くに取り入れ、ただしく表出する者となるでしょう。強制し、命令し、一方的に指示して身につけたものは、その子供を結果的には歪よこめる副作用を生じます。

X X

なお、幼児の場合は、言い表される言葉より、言葉としては表出できませんが理解できる言葉を多く持っているのが普通のようです。

とにかく、子供を主として世話をするお母さんは、愛情一杯で、こどもに楽しく語りかけ、こどものそのままを受け入れてやる人間関係を基本にもつことが大切です。それを忘れて、何かを教えようとすることは、絶対に慎むべきことです。



# 保育のしるべき

1991. 4 No. 33

発行 左京キリスト教会出版部  
〒606 京都市左京区下鴨南  
茶ノ木町29 電話781-9640  
振替 京都5-40566  
編集 教会役員会  
印刷 片桐軽印刷

幼な子をつまづかせてはならない。

— 聖書 —

## どのように育てるか

— 生まれてから — (十一)

松 下 昌 義

今月は「玩具」についてご一緒に考えてみましょう。

子どもを見ていますと、自分の身の周りにあるものは何でも玩具にしてしまいます。それにいたしましても、子どもにとって玩具はどのような働きをするものなのでしょうか。

それは、一言で申しますと、自分を育てる道具なのです。何かの物を造る為には材料と共に道具が必要です。材木があってもそれを切ったり、削ったりする道具がなければ、材木から何も造ることはできません。それと同じように私たちの頭脳もさまざまな道具を用いることによって、刺激を受け発達成長して自分作りをして行くのです。

子どもにとって自分作りをしていくためにはどうしても玩具という道具が必要なのです。

今日では、玩具と言えませんが玩具店にあるさまざまなものを連想してしまいますが、玩具店にあるものが必ずしも、子どもの自分作りに最も良

いものだとは言えません。

道具としての玩具の役割を具体的に少し申しますと、それは、子どもに想像の世界を広げ養うということ、創意工夫させる知的刺激になること、自分を表現する満足感を与え養うことなどです。そしてそれらは見る、聞く、嗅ぐ、味わう、触れるといった感覚器官をとおして行われます。

このようなことが一応理解できると、どのような玩具を、子どもにどのように与えればよいのか、と言うことが自然と了解できるようになります。

第一に大切なことは、子どもが興味を示さない玩具を与えても意味がありません。興味を示さないということは、道具としてその子どもの能力や感覚などに合わないということです。ですから、親が一方的に良いと思って与えてはなりません。だからと言って、なんでも子どもが興味を示すものを、求めるままに次々と与えてよいものでもありません。

先にも申しましたように、玩具は自分作りの道具なのですから、殺伐とした世界を想像してしまうことにつながるような物は与えてはなりません。楽しく、美しく、喜べる世界に子どもの思いの世

界を広げ導き発展させるような玩具をあたえることは、どれほど注意してもしすぎにはなりません。

次に言えることは、子どもに創意工夫を促すような玩具を与えることです。創意工夫と言いましても、やはりその子どもの能力に適したものでなければならぬことはいうまでもありません。玩具の中には、どう見てもそれ以上に発展させることが出来ないような、言わば完成品のようなものがあります。ただ眺めていられるだけというもの、子どもが手にとっていろいろと楽しく遊べないものです。

このような玩具に子どもは、玩具店に行きますと、ちょっと見では興味をしませんし、親も立派さに引かれて、つい買ってしまう。大体そのような玩具は高価な物が多いようですが、しかし、子どもはすぐに飽きてしまいます。おまけに、大事に使いなさい、壊してはいけません、などと親は注意をしたりいたします。玩具は飾って置くものではないのですから、親は思い違いをしてはなりません。そのような玩具の与え方をし

る家庭にいきますと、必ず同じような傾向の玩具が沢山あって、次から次へと買いつけていくことがわかります。

このような玩具の与え方は、子どもにとって最悪の結果を招きます。一つの玩具を大切にすることが出来ず、すぐにあきてしまつて、興味が次々と軽々しく移りかわり、ものごと集中して取り組む態度が身に付かず、何でも要求すればすぐにかねえられるというわがままの心と楽しんで遊ぶという気持ちが失われ、自分で創意工夫をする能力をのぼすことが出来なくなつてしまいます。このような親ごさんをわたしは大勢知っています。

×

×

それにしても、なにごとでも同じ物を使っていると、必ず飽きて来るものです。玩具の場合も同じです。このような場合どうすればよいかといいますと、子どもが飽きて来たなと思つた時、その玩具を子どもの前から取り除けてしまうのです。そして、しばらくしてから出してやりますと、とても興味を示して、新しい物とは違つた思いで、懐かしい思いをいた

て遊びだします。

玩具を選ぶ時に気をつけておきたいもうひとつのことは、すぐに壊れてしまうような物は避けることです。複雑なものはいずれやすすいですが、また三才までの子どもには必要はないと思います。

また、安全の面からも十分に配慮しておくこともたいせつです。

×

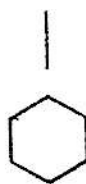
×

玩具は子どもにとって自分作りの道具であることを、もう一度確認しておきたいとおもいます。用いるのは子どもですが、幼児の場合には与えるのは親です。

なにを自分作りの道具として子どもに与えるかは、親の生き方や考え方によつて変わってきます。

親は、いつも子育てにおいて、目に見えない神さまへの祈りごころを持ち、その眼差しで子どもに願ひ心を向け関わつて行きたいとおもいます。

みなさまの平安と健康とをお祈りいたします。



# 保育のしるべき

1991.5 No.24

発行 左京キリスト教会出版部  
〒606 京都市左京区下鴨南  
茶ノ木町29 電話781-9640  
振替 京都5-40566  
編集 教会役員会  
印刷 片桐印刷

——聖書——  
育て給うは神である。

## どのように育てるか

——生まれてから—— (十二)

松下昌義

人間が成長していくなかで大切なことからの一つに、親子の分離ということがあります。

子供が親からどのように分離していか、また、子供が親からどのように分離していかということ、親にとっても子供にとってもとても大切なことからです。

親と子の分離は、あたかも鳥が自分の巣から巣立ちをしていくようなものです。一生懸命に卵を温め孵化した雛鳥にせつせと命懸けで餌を運び続けた親鳥は、やがて成長した我が子が一人立ちしていく時がくれば、巣立ちをさせなければなりません。そうすることが親にも子にも幸いなことなのです。何時までも餌を親鳥から運んで貰っている子鳥は決して一人前にはなれません。また、何時までも、子供の鳥を巣に引き止めておく親鳥は愚かな鳥です。時がくれば、さっと巣立ちさせ、また巣立ちする親子分離の爽やかさがなくてはならないのです。

子どもが三歳前後になりますと、今まで親の真似をし、とても素直でいい子であった状態から子どもは一変して、困った子になってしまいます。

何でも「いや」といい、ことごとく反抗しはじめ強情な子どもになってしまいます。ですからこの時期の子どものことを「反抗期」とか「強情期」とか一般に呼ばれています。(このことについては保育の第一号に少し記しておきました)

三歳頃になりますと子どもの行動が身体的にも知的にも精神的にも、それ以前の姿と全く違ってきて、所謂、大人の小型のようになってきます。それだけ子どもが一人立ち出来るように成長してきたということです。そこで、親の言うままにならないで自分の力で行動をしようとおもうようになり、親に対して「いや」というようになるのです。

しかし、未だ三歳ですから生活のいろいろな場面に於いて正しく判断し適応できませんので、親は子どもの主張や欲求を受け入れることはできません。そこで親と子のせめぎあいが始まるのです。このような親と子の姿を、私達はいろいろな処でよく見かけます。全身を振りまわし、ありったけの大声をだして泣き叫ぶ子供、しかし断固として聞き入れようとしないうお母さん。子供はそのようにして、自

分の欲求はどのような時に受け入れられ、どのような時に拒否されるのかということを知るとともに、自分はどのような行動をとればよいか、また叱られるのかなどを体験的に学ぶのです。このようにして子供はすこしづつ、自分以外の人の存在、つまり他我を知ると同時に、その他我が自分に何を期待し、自分がこうすれば相手がどのように反応して来るのかということを得得して行くのです。つまり、ものごとに対する適応行動が身についてくるのです。このようにして子供は健全な自分自身、つまり自我を育てていくことになるのであります。

このような三歳頃の「反抗期」は、正しい自我の芽ばえにとって大切な時期であります。将来子供が健全に一人立ちしていくためには、「反抗期」といわれる時期を、子供にとってよりよく学習できるような時として、親は知恵深く関わってあげることが必要なのであります。

青年期になって、強くしつかりとした意志をもち、自分で判断を確実にくだし責任ある行動をとれるようになった者の大方が、反抗期を上手に通過してきた者であるという専門家の報告があります。また、児童期になって様々な問題行動を起こす児童を調べた専門家の報告のなかに、幼児期に反抗期を体験することなく、親を困らせず、所謂「よい子」であったと言われた児童が多いということがあります。

反抗期があるということは、神さまの恵みであります。この反抗期をどのように通過させてあげるかということは、親が子どもを育てる時の課題であるといえましょう。

反抗期のない子どもがいます。しかし、反抗期は子どもが成長するために通過しなくてはならない大切な自分作りの時なのです。どのような子供にもあるのが当然なのです。にも関わらず、それが無いということは、幾つかの原因が考えられます。

一つには、自立への欲求を生み出せないほどに虚弱な体質の子どもです。しかし、このような子どもは別な配慮を必要とするお子さんであって、ここではとりあげません。

二つめには、親の育児態度が厳しすぎて、子どもを威圧して親の言うとおりに従わせようとした結果そうなったというばあいです。このような子どもは必ず、青年期になってさまざまな問題行動が出てきて、親を窮地に追い込むことになりましょう。

三つめには、子どもの要求をなんでも聞き入れ、子どもの言いなりに親が従ったので、自分が確立できずに、わがままで他人を思いやることができず、人間関係が上手にもてない大人になってしまいます。

いずれにしても、親は子どもに、子どもは親に、知恵深く分離独立できるように育て関わっていかなくてはなりません。その第一歩が三歳頃の反抗期に求められるのです。

## あとがき

神さまによるご縁で、二十七年間幼児教育に関わらせていただきました。

私の妻が若いときから「幼児教育」にたずさわっていた関係で、いろいろと幼児期の保育の大切さを聞くにしたがい、私たちがその信仰において願う幼児の保育を行ってみようと思い、左京教会付属の幼児教育機関「白百合ホーム」を開設することになりました。「白百合」はキリスト教会では復活のキリストの命の象徴とされておりますが、「ホーム」と名付けましたのは、本来子供は家庭で家族の一員として育てられる事が最もよいのではないか、という思いからでした。

「白百合ホーム」の建物や設備は手作りで園児も少数でしたが、そこで一緒に過す教師の人格的な感化こそが幼児の保育にとって最も大切なことだと信じ、お祈りすること感謝すること、喜ぶこと、友達を思いやる事を等を、礼拝を中心にして教師も子供も保護者も泣き笑いしながら共に手を携えての日々の保育でした。信仰を共にする良き先生方と御一緒出来ましたことは本当に有り難いことでした。

そのような中から色々な文章が生まれ、それらを纏めて「園長さんのためいき」「保育の心」「どうすればよいのか」等が冊子となって生まれて来ました。その中の一つが「どのように育てるか」という冊子です。

これを、お読みくださる方に少しでもお役にたつ事が出来ればと思います。

一九九五年十月

みちしるべ文庫 十八

「どのように育てるか」

一九九一年十月一日発行

一九九五年三月十五日 第二版発行

一九九八年六月二十日 第三版発行

二〇〇〇年八月一日 第四版発行

著者 松下昌義

発行所 左京キリスト教会出版部

京都市左京区下鴨南茶の木町二九  
電話(〇七五)七八一―九六四〇